

第3回塩竈市総合教育会議 議事録

- 1 日時 平成27年8月7日(金)
開会 13時30分 閉会 16時00分
- 2 会場 塩竈市公民館本町分室
- 3 出席者 塩竈市長 佐藤 昭
塩竈市教育委員会
委員長 柴田 仁市郎
委員長職務代行者 太田 忍
委員 池野 暢子
委員 山田 達磨
教育長 高橋 睦磨
(意見聴取者)
塩竈市教育アドバイザー 田中 まゆみ
塩竈市教育アドバイザー 伊藤 義昭
塩竈市教育アドバイザー 遠山 勝治
塩竈市教育アドバイザー 本田 伊克
塩竈市立第一小学校教諭 佐藤 康一
塩竈市立第二小学校教諭 菅原 淳
塩竈市立第一中学校教諭 鈴木 美幸
塩竈市立玉川中学校教諭 渋谷 和彦
保護者代表 佐藤 敬
保護者代表 高橋 千賀子
保護者代表 横江 政洋
保護者代表 昆 早苗
(事務局)
市民総務部長 神谷 統
市民総務部政策課長 川村 淳
市民総務部政策課係長 津田 康之
教育部長 菅原 靖彦
教育部教育総務課長 渡辺 常幸
教育部学校教育課長 高橋 義孝
教育部生涯学習課長 本田 幹枝
教育部市民交流センター館長 伊東 英二
教育部教育総務課係長 菊池 亮
教育部教育総務課専門主査 鈴木 和賀子

- 4 協議事項 議題1 塩竈市教育大綱策定に向けて

5 概要

- 開会
- 佐藤市長あいさつ
- 柴田委員長あいさつ
- 出席者紹介
- 協議事項

議題1 塩竈市教育大綱策定に向けて（事務局説明）

塩竈市の教育の現状と課題について、市長、教育委員、意見聴取者と協議。

【主な意見】

〈佐藤教諭〉 一小の全国学力・学習状況調査の結果は、全国平均を少し上回っている。ただ、基礎的内容である A 問題は概ねよい結果が出ているが、B 問題の記述式で、回答率が悪くなっている。一小では今年度から、新聞を読んで、書かれていることを自分の考えにして紙に書くといった NIE 教育に重点を置いている。書く力を伸ばす、自分の思いを分かりやすく伝えるといった表現する力を伸ばしていきたいと考えている。

〈菅原教諭〉 二小では、県の指定校となって学力向上の取組を行っており、今年で3年目を迎える。算数に関しては、基礎的な A 問題は全国平均近くまできている。B 問題は応用力が必要であり、依然として課題となっている。5年生対象の県が実施する学力調査では、算数に関しては県平均を上回っていたが、国語に関しては県平均を下回っている。国語の力をつけていくことが応用問題や読解力を要する B 問題を解くために必要となってくる。その傾向がはっきりしたことから、読書の習慣を身に付けさせることが必要と考え、朝の読書の時間を週1回から3回に変更した。少しでも子どもたちに本を読む機会を与え、習慣付けさせていくことが必要で家庭にも呼びかけをしている。

〈鈴木教諭〉 一中では、去年、今年と学力が県平均を下回る結果になっている。基本的には学習をすることで自分に役立つのか、どんな点が有効なのか、その辺を子どもたちにしっかり押さえさせながら、授業を展開している。必ず授業の最後には、この1時間の学びがなんだったのか、振り返る時間を重視している。例えば、数学では、復習問題を行い、それ以外の教科では、1時間の学びはなんだったのか、自分の言葉で表現するといった取組をしている。一中の課題は全国学力学習調査の結果にも表れていますが、難しい問題には苦手意識があること。また、学習意欲が少し欠如している傾向にある。そこで、学習に興味を持ってもらうために、学習意欲の喚起も授業の中で考えながら取り組んでいる。

〈渋谷教諭〉 玉中も県平均より低いけれど、良くなっている。向上している要因は、子どもたちが学習する場面に先生方がいろいろ関わっていることが上げられる。例えば、玉中では、家庭学習ノートを担当のチェック以外に、部活動の顧問もチェックしている。部活動の顧問の先生が勉強も見つけてあげることにより、部活動でも勉強の頑張りについても声がけすることができる。この声掛けによって、子どもたちは頑張ろうと目つきが変わってくる。たくさん目の子どもたちの学習を見ていきましょうということで、教師一丸となって取り組んでいる。数学にしても国語にしても、点差に幅があるのは、子どもたちの意欲面での欠如というのがあると思う。学習ノートを部活動ごとにチェックすることは、顧問の先生からも、部活動以外の勉強面での頑張りについて、声がけできる機会を意図的に作っていることであ

り、玉中の良さだと思う。それが、どれだけの子どもの励みになっているか数値的には表れていないが、先生が子どもたちと積極的に関わりを持つ場面を材料として集めましょうと全職員一丸となって取り組んでいる。授業の作り方から家庭学習までテコ入れすることで、平均とまでは行かないまでも良い傾向になっていると感じている。

〈太田委員〉 二小の先生の話のように、応用問題を解くためには読解力が必要だとなると読書はとても大切なことである。今の子どもたちは、本をなかなか読まない。ぜひ、読書を習慣づけるよう取り組んでほしい。

〈柴田委員長〉 塩竈の子どもたちのデータをみると残念ながら学力も運動・体力も落ちている。しかしながら、学力が向上すると運動能力も上がってくるという不思議な相関関係があると思う。このことは、経験のある先生方はよく感じていると思う。スポーツを学校の生活の中でどう取り入れていくか。先ほど、渋谷先生がおっしゃっていたお互いを励ましあい、関わりをもつことによって、頑張りがあらわれてくる。赤点を1つでも取ったら、大会には出さないという指導をする先生がいました。そうすると、部員みんなで励ましあいながら、赤点を取らないように勉強もするわけです。そういう結びつきが顧問と子どもたちとの信頼関係につながるのではないかと。

〈山田委員〉 玉中の先生のお話がありましたが、いろいろな人の目で子どもを見てあげることが非常に大切であると思う。以前、教育委員会でも話題になりしたが、福井県の取組の中に中学校でたてもちとよこもちがあるという話がありました。よこもちではなく、たてもちすることによっていろんな課題をタイムリーに検討できる事例がありました。多くの先生が子どもたちに関わることは有効な手立てであると感じました。

〈池野委員〉 学校現場は頑張っていることが先生たちの話を聞いて分かりました。基本的な生活習慣のことですが、早寝、早起きがどの程度行われているのか非常に気になる。子どもが大きくなると親は働きに出るようになって、夕飯の時間も遅くなって、寝る時間も遅くなる。家庭内でも時間の使い方というか、基本的な生活習慣を見直すことも必要ではないかと。

〈佐藤市長〉 学校と家庭の相関関係の話が出ました。資料にある成績のグラフと、勉強時間のグラフは傾向が一致している。保護者の方々は学校教育の現場の中で学力の向上という問題について、家庭としてはどういう課題問題があると思いますか。

〈高橋氏（保護者）〉 うちの子は小学生と中学生ですが、私自身が共働きで、夏休みになると自動的に留守番になり、子どもたちはいったい何をしているのか全く分からない状況である。私自身帰ってきて、ご飯作って、何かしているとあつという間に9時は過ぎてしまう。そこから、子どもたちが勉強して、寝るのが11時過ぎになってしまうのが今の生活パターンである。また、朝早く起きるのかというと、長男は部活があるので起きるが下の子に関しては、家を出るとどうなっているかはわからない状況です。スマートフォンやタブレットを子どもたちが持っているので、連絡を取る手段としては良いですが、昼間はユーチューブやゲームをしていると思うし、何も言わなければずっとやっている状況である。中学生の息子は、読む力が乏しくて、まず読書はしないし、見るとしてもタブレットで漫画を見るといった感じである。息子にいろんなことを尋ねても答えがしっかり返ってこない。文書を作る能力が欠けていると感じる。勉強の方は部活動の顧問の先生が勉強ノートを毎日3ページやってこないと部活動はやらせないという方針があり、部活に出たい一心で自主勉強はしている。もう少し、家庭の中でも声掛けが必要と感じている。

〈横江氏（保護者）〉 4月の授業参観で自主学習ノート2冊を学校が用意しましたが、その効

果に疑問がありました。基本的に家で学習する習慣がない中で、少しでも家庭学習の機会を与えるわけではありますが、塾に行ったりしている子には意味がないものではと思っていた。実際やってみたところ、先生のコメントが書いてあった。また、勉強以外にも部活のことであったり、学校生活のことであったりが先生のコメント欄に記載されていた。親として感動しました。こういうやりとりが子どもの勉強意欲を高めることにつながると思う。家庭学習の時間増加、学力向上につながると思う。自主学習ノートはぜひ続けてほしいと思う。

〈昆氏（保護者）〉 私の子どもは玉中ですが、この前、部活を見に体育館に行ってみたら、誰もなくて、暑いから休みなのかなと思ったら、カーテンの中で勉強していた。顧問の先生曰く、期日までにサマーワークやらないと部活ができないと。ちょうど体育館に行った日がその期日で、ワークをやってきた人は半分で、残りの半分は部活もできなく、ずっと勉強をしていた。夏休みの宿題については、早く取り組みなさいと子どもに言っていたが、部活でも取り組んでもらい助かる。玉中では、今年は宿題をワーク中心とし、国語の弁論文や感想文に力を入れていると感じる。宿題を多く出しても、部活をやりたいだろうし、メリハリをつけた宿題の内容になっていると渋谷先生の話聞いて思った。親自身も夏休みの時間に子どもと向きあうべき。先生方も頑張っているので家庭教育も頑張らないといけないと思う。生活の根本の中から、早寝早起きですとか、基本的習慣についても気を付けていかないと学力向上の課題の裏側にある問題だと思う。

〈佐藤市長〉 小学校の家庭学習に時間について、H25 から H26 にかけてかなりポイントが上がり、中学校では横ばいである。その違いについて、教育長はどう思うか。

〈高橋教育長〉 教育委員会からお願いしている内容で小中を分けていることはありません。ただ、考えられることは、学校全体が落ち着かない状態にあるときには意欲が湧かない。例えば、学力学習状況調査において最後まで問題を解かないであきらめてしまう状況があったりして学力が低いことにつながっている。中学校では、部活動が終わり、家に帰って夕飯を食べてとなると時間が足りなくなるのではないか。これは現実にある問題。ところが、中学校3年生になって部活が終わり、時間ができたときに、勉強するかというとそうはならない。時間ができたらそこで、タブレットをやったり、ゲームをやったりで学習時間は変わらない。意欲の問題があると教育委員会では考えている。

〈本田アドバイザー〉 学力調査が全国で行われておりますが、学校間、地域間の比較にどうしても焦点が絞られてしまうが、ランキングに一喜一憂してしまうのはどうかと思う。家庭学習については、先生と生徒のコメントのやり取りの話がありましたが、子どもたちは自分がやったことに対して、先生がほめてくれることは本当にうれしいと思う。ただ、子どもを励ますだけでなく、成果を認めることは大きな励みになると思う。塩竈市ではクリアファイルを作成しているが、それがきっかけで、子どもに対して勉強の声かけができると思う。

〈伊藤アドバイザー〉 小学校での学力向上なり、子どもの学習意欲の向上について、家庭の取組は絶対にはずせないと思う。先生からの声かけもうれしいですが、家に帰って、学習したことを振りかえり、授業中のことを家族の方に話すこと、家の人からの「がんばったね」という褒め言葉が親子の関係を深めたり、認め合ったりとか励みになったりとかにつながる。そのことが最も大切なことである。忙しいとは思いますが、学校生活をしっかり受け止めて、直接的間接的な子どもの成長を受け止めて、そのことを子どもに返してあげることが大事。このようなやりとりが子どものコミュニケーション能力を高めることにもつながる。子どもとの関わりを学校でも家庭でも持ってもらいたい。中一ギャップについては、中学に上がると

生活が変わり、何をしてもよいかわからなくなる。焦りだけがでる。中学校の勉強の仕方を教えることが必要。学力学習状況調査の結果については、平均値の中の分析が必要で、真ん中くらいが多いのか、平均以下が多いのかなどで課題解決の対応が違ってくる。子どもたちが勉強の仕方のノウハウを身に付けることで、子どもたちが意欲的に取り組んでいける道筋を示すことが必要である。

〈田中アドバイザー〉 各学校の先生からご指摘いただいたポイントは適切であり、いろいろな取組をしているが、大事なことは授業である。学力調査を分析すると小学2年生くらいからの勉強が結果に反映されていることがわかる。低学年の時期から意識することが大事。分析をするとその手立ては授業改善につながると思う。授業の開発を進めてほしい。よく理解できない子に対してどう時間を割くとか、授業内容の構想がとても大事になる。中学生にとっては、勉強の仕方を教えることが必要。それが点数に結びつく。学校だけではできないことを家庭が両輪として取り組むことが大切。家庭と学校をつなぐのは授業参観である。教職員の指導力がみられる授業をしてほしい。授業が面白ければ親は来るし、懇談会の持ち方を工夫すれば親は残る。学校として、担任として伝えたいことをしっかり伝える場が大事である。スマホ対策については、親が買え与えているわけで、親の権限で制限をかけることが必要ではないか。

〈遠山アドバイザー〉 塩竈市の学力向上の取組は成果が上がっていると思う。学力調査の分析をしっかり行っているし、具体的な取組を各学校で行っている。また、効果が上がっている取組をリスト化し、情報共有もしている。研究発表会という形で共有もしている。この取組は素晴らしいと思う。塩竈市は学力調査でいうと下位の人が多いまちだと思う。柴田町では放課後学習ということで、週2回大学生や退職した先生がボランティアで勉強を教える取組を行っている。参加率が高くニーズが高い取組だと感じている。次期学習指導要領では、学習の結果ではなく、プロセスを大事する方向に変わってきている。学力調査では結果は示されるが、どういう学びをしているか見えない。一生学びは続くわけで将来のためにもプロセスは大事である。

〈佐藤市長〉 不登校の問題では、学校の現場ではどのような取組を行っていますか。

〈鈴木教諭〉 一中は現在8名ほど不登校の生徒がいる。今年から、生徒指導連絡会を開催している。不登校生徒から不登校ぎみの生徒までを洗い出し、校長、教頭、主幹教諭を中心に生徒指導主事や学年主任、養護教諭、スクールカウンセラー、生徒指導アドバイザー、対象生徒の担任を交えて情報共有している。子どもたちのことを把握するためにアセスメントシートを作成して、その子の置かれている現状がどうなっているのか、家庭ではどうなのか、洗い出しを行い、どう対応していくかカンファレンスシートを作成し、一人ひとりに対して、きめ細やかな対応していく取組を実施している。他の取組で「あのね、ほっとライン」を設けている。悩み等を吸い上げるため、担任のみが見られるようにしている。

〈渋谷教諭〉 夏休みは子どもたちにとって、楽しみな反面、大変な時期でもある。小学校までの夏休みはゆったり過ごせるが、中学校は部活動があるし、一年生にとっては本当に忙しく感じていると思う。これまでの我々の認識では、夏休みにたくさんの宿題を出して家庭学習を頑張らせる感覚でいた。けれど、そうではなく、そもそもの宿題が多すぎるのではないかと感じている。不登校傾向に陥りやすい子どもたちは、学力的にも、部活動的にも弱いところがある子どもたちであり、夏休みが明けの一週間ぐらい前には、宿題が終わってなくて、不安になってしまうのではないか。その子どもたちが、二学期学校に行きづらくなってしま

うのではないか。このような傾向があったのではないかと玉中でも反省があつて、夏休みの課題を与えるにしても量と質をしっかりと検討して、どの子どもでもやり切れるような宿題の量にすること、さらに夏休み明けのテストも宿題をやればできるレベルのテストにすることで子どもたちに自信を与えるような内容に変更しました。夏休みの頑張りが成果として現れるテスト内容にして、子どもたちに自信を持たせることができれば、二学期行きづらくなる子どもはいなくなると感じている。

〈田中アドバイザー〉 私がけやき教室で働いていたとき、子どもたちがどのような経緯で来たのか調べたことがあつた。理由はそれぞれあつて、傾向と対策が千差万別であつた。ただ、小学校と中学校で何が違うかという点、小学校は担任制で中学校は教科担任制であることで勉強も難しくなりついていけなくなったり、教科で先生が変わるから、うまく自分の悩みを伝えることができなくなったりする。

〈本田アドバイザー〉 学校体験は世代が違ふと感じた方が非常に違ふ。話にでてるように、スマートフォンや SNS の出現によって、子どもたちの価値観も多様化している。

〈佐藤市長〉 不登校問題については、原因と結果について、まだまだ問題を掘り下げる必要がある。

〈柴田委員長〉 中学校になると部活動が始まるが、文化部、運動部両方に入ることはできないのか。心身共に成長するためにはどちらも必要ではないか。週に 1 日か 2 日文化活動をする日があつてもよいのではないか。このような柔軟な発想が必要である。地域行事への参加については、参加意識を高める必要がある。

〈太田委員〉 食育は当たり前のことで、早寝、早起き、朝ご飯も本当に当たり前のこと。母親がご飯を作れば、必ず子どもは食べるはず。ご飯を食べる雰囲気や家庭の中で作るべき。当たり前のことをしっかりと実践してほしい。障害のある方と一緒に生活することは非常に大変であるが、そのことから生まれる心の共有は子どもにとって素晴らしい財産になる。二小にも支援学校が来るとのことですが、その時二小の子どもたちも地域の皆さんも共に暮らすことを教育の現場で共有できれば、とても素晴らしいことである。

〈山田委員〉 塩竈は歴史、文化があり、いろいろな産業が営まれてきた歴史がある。総合的な学習でいろいろな活動されているが、その中で地域の人材を活用してもらうことが重要。地域人材の活用に力を入れてほしい。

〈渋谷教諭〉 玉中では、土曜授業でキャリアセミナーという取組を行っている。地域の職業人の生の話を聞くということで、子どもたちは本当に身を乗り出して話を聞いている。職人さんが成長曲線の話をしたとき、下積み時代のがんばりがあつて一気に成長するような話ですが、我々も同じような話はするが、全然説得力が違ふ。地域の方に生でそういう話を聞くことができることはすごく大事なことだと思う。地域人材の活用ということ言えば、塩竈は人材の宝庫であると思う。学校に来ていただける企画を我々も計画して子どもたちに火をつけたいと思う。

〈佐藤市長〉 今まで出ている課題は地域と密接に関係している話であり、この町の教育を良くすることにつながっていくと思う。これからも地域の人材を発掘していきたいと思う。

〈鈴木教諭〉 職場体験については、仙台の企業にもお願いしている。仙台市では商工会が中心となって受入の手伝いをしてくれる。一中では、今までのつてを頼りに受入先をさがしているが、塩竈には多様な職種の企業があり、人材も豊富なので職場体験できる企業のリスト化等してほしい。

- 〈佐藤市長〉 今の意見は商工会議所へ伝えて、ぜひ実現できるようにしたい。
- 〈菅原教諭〉 一人ひとりのニーズに応じた特別支援教育の充実ですが、資料に示されているものは特別支援学級に在籍している児童生徒の人数だと思う。しかし、知的には障害はないが、発達障害と言われる子どもが通常学級に実際いる状況である。その子たちへの支援をどのように行っていくのが、学校現場としては課題となっている。そういう子どもを早期に発見して対応することが必要となってくる。実際に通常学級にどれくらいの子がいるのか把握して、そのような子たちに必要な教育をする環境を整備しないといけない。
- 〈昆氏（保護者）〉 学校の中には知的は大丈夫ですが、情緒不安定な子どもは確かにいる。そういう子どもがクラスで浮いている。保護者の方から相談を受けるが、病気なのか、そうではないのか、実際自分の子どもに病気という判定がつくのが怖い保護者が多いと思う。また、そういう子が不登校になっている現実もある。そういう子どもへの学校現場での対応が非常に重要で、保護者の方からの相談の多さが問題の大きさを物語っていると感じる。
- 〈渋谷教諭〉 記録的な暑さで、我々も十分配慮はして、水分補給等は行っているが、どうしても具合が悪い子どもは出てくる。熱中症になった子どもを保健室に連れて行ったときに、エアコンがあると子どもたちの回復も早いと思う。子どもたちの安心・安全につながると思う。
- 〈高橋教育長〉 そういう状況の学校があるのも事実なので財政状況を考慮しながら、せめて保健室については整備をしていきたいという思いはある。実際には、学校現場においては、常に氷を用意するといった対応等はしていると思う。
- 〈佐藤市長〉 今の話は、塩竈市の学校現場の課題として、受け止めていく。今日、仲良しクラブを訪問したら、32度もあった。ここで一日過ごすのは本当に大変なことだと感じた。老朽化した校舎については、なかなか建替は難しいが、三小を見てもらえば分かるとおり、改築に近い形のものができる。各学校においても、この大規模改造事業を活用できるよう検討するべきである。
- 〈柴田委員長〉 大切なのは学校と家庭と地域の連携である。学校の先生方は一所懸命やっただけだと思っているが、家庭との連携にもう一步踏み込むことが必要ではないか。地域との関係についても、強いきずなで取り組んでほしい。
- 〈太田委員〉 学校と家庭と地域が一つになって、みんなで子どもを育てることが大事。家庭の大切さについては今の時代だからか、本当に強く感じる。生活の価値観が多様化している中でいかに家庭教育が大切かということをしごく痛感している。
- 〈池野委員〉 今の時代、高齢妊娠が多くて、子育てを始める年齢も上がってきている。今のお母さん方を見ていると、覚悟ができていない方もいる。学校に入る前の子どもに家庭がどうやって、基本的習慣を教えていくかが大事ではないか。
- 〈山田委員〉 子どもたちにとっては、自分の存在を認めてもらえて、自分に何か役割が持たされて、それに対して評価してもらえる、そういうサイクルがあると、自分を肯定的にとらえることができ、自信を持つこともできるのではないか。そうすることが、学習の意欲にもつながる。子どもたちが自信をもつことができるように、学校・家庭・地域が連携すべきである。
- 〈昆氏（保護者）〉 先生たちの子どもへの熱い思いを聞いて、保護者としても家庭の中でもう少しがんばらないといけないと感じた。我々も初心に帰って早寝、早起き、朝ごはんに取り組むべきだと感じた。PTAの役員という立場があるので、他の保護者へ情報を発信していきたい。

〈横江氏（保護者）〉 PTA 活動をして感じることは、家庭力が低いということ。ただ、低いと嘆いているわけにはいかず、先生たちや教育委員会へお願いすることは、親を教育してもらいたい。PTA 活動で研修会等を行っても、結局参加する方はいつも同じメンバーで、本当に出てきてほしい保護者には声が届いていない状況である。また、今回、保護者代表ということで4人が出席しているが、とても有意義な話し合いであり、多くの保護者の方にも聞いてもらいたい内容である。このような意見交換会をもっと開催してほしい。

〈高橋氏（保護者）〉 親がまだ親になりきれいな状況があると思う。親に対する教育も必要ではないか。市 P 連と共催でもいいので、このような座談会ができればよいと思う。またそのような行事に参加しやすい雰囲気作りも大切と感じた。

〈佐藤氏（保護者）〉 地域で子どもを育てることは重要。一小でも地域の皆さんと一緒に祭り等の行事をやっているが、その時は、近所のおじいちゃん、おばあちゃんたちが喜んで参加してくれる。このような活動を続けていくことが大切である。

〈遠山アドバイザー〉 不登校の問題を考えたとき、子どもたちを見て最近感じることは、人に対する基本的な信頼感情が薄いということである。また、親にしても、子どもが学校に行っていないことを重要視していない人も多い。また、親自体が不安定な人もいる。こうなると学校だけではどうしようないので、福祉サイドとの連携が必要となってくる。そういう方々へ行政がしっかり対応していくことが必要である。

〈田中アドバイザー〉 先日行われた防災訓練では、学校を会場にしながらも、地域と一体となった訓練を行っている。まさに地域と学校が連携することで子どもの命を守る取組で大変感銘を受けた。また、不審者情報等は一齐に情報が伝わるシステムがある。教育委員会と学校と地域と家庭が情報共有できるツールがあることは、子どもたちにとってよいことであり、塩竈は体制が整っていると思う。いじめの問題では、さらに連携は不可欠である。親が気付かなくても地域の方が気付いたりする場合もある。たくさん目で子どもたちを見ていくことが重要である。

〈菅原教諭〉 二小では保護者の方に、学習支援ボランティアということで授業のお手伝いをしてもらっている。5年生家庭科の裁縫では、男の先生は苦手な方が多いので非常に助かっている。学校生活の中で、保護者の方に手伝ってもらえることで、教員も限られた時間を有効に使うことができている。今でも、保護者、地域の方々に支えられていることを実感するが、もっと、学校内の活動に入っていけるような環境を作っていきたい。

〈佐藤教諭〉 学力向上や不登校対策については、保護者と我々教員との共通理解が必要であると感じた。子どもたちが楽しく学校生活を送れるために、教員が何をすればいいか、やはり、分かる授業づくりが第一である。保護者や地域の方と信頼関係を築きながら生徒指導にあたる必要があると思う。